

美術部門 作者コメント

平面作品

『ある五月の夕暮れ ～一瞬の静寂～』 創大職員 永井靖二



『西に満々たる夕陽 東に満月煌々たり』

立川から八王子へ。晴れの日も雨の日も遠くに富士を眺めながら、40年間通い続けた多摩川沿岸の道。見上げればどこまでも続く宇宙（そら）。

「朝々仏と共に起き、夕々仏と共に臥す」

人生かくもあれ！

『いきが,できない』 創大1年 宮井陽子



作者コメントなし

美術部門 作者コメント

『いつかまた、心惹かれるこの国へ』 創大1年 三國花蓮



夏季語学研修でイギリスのバッキンガムに行った際、ホストファミリーが連れて行って下さった世界遺産の「ストウガーデン」を描きました。私にとってイギリスは念願の行きたかった国であり、初めての海外経験だったため、1日1日がかげがえのない宝となりました。創立者もご覧になられた世界の美しさにふれ、より地球や人々の平和を守りたいとの思いが強まりました。

今よりさらに成長した姿で、必ず再び創大生としてイギリスに行くとの誓いを込めて描いた作品です。

『いのちの鼓動』 創大1年 湯川春香



人間と、人間の周りに溢れているもの全ての命が躍動する様を描きました。

この絵を見てくださった人が人の心の鼓動が高鳴り、幸せな気持ちになって頂ければ嬉しいです。

美術部門 作者コメント

『咲み』 創大4年 東郷良咲



創大生として最後の創芸展を迎えるにあたり、創大に送り出してくれた家族や支えてくれた方々、いつも見守ってくださる創立者・奥様へ感謝の思い、そして一生涯創価の金看板を背負い、芸術という平和文化を広めていくという決意を作品に込めたいと思いました。

この絵に描かれている動物は皆、私が今までに日本画で描いてきた動物たちで、日本画に出会ってから今までの人生の軌跡を表しています。また私の好きな言葉である「桜梅桃李」のそれぞれの花や、創立者のお好きな萩、それぞれ「勝利」「平和」「幸福」「希望」「感謝」の花言葉を持つ月桂樹、オリーブ、ドラセナ、ガーベラ、カンパニュラなどを描き、これまでの自分の人生や思い、これからの決意などを表しています。

『渴望』 創大2年 五十嵐涼



手の形は完全に指の先が上に向いておらず、掌を平行になるようにしています。そこから生える食虫植物は虫を待ち構える一種のものであり、血の色や模様で毒々しさを表しました。己の手が異形と化しても求める貪欲さをこの絵に表そうとしました。

美術部門 作者コメント

『郷愁』 創大3年 川上真由



飛行機から見た自分の生まれ育った町を描きました。初めて一人で地元から東京へ向かうときに見た景色であり、地元を好きであるという気持ちや地元で育ったひと時ひと時を思い返すとともに、東京という新天地で頑張りたいという決意もこもっています。また、将来地元に貢献したいという思いも乗せて描きました。絵本のような懐かしさや安心感を感じる色遣いを意識しました。

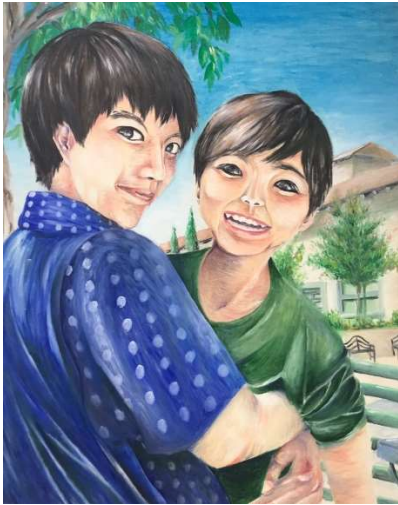
『子亀と海』 創大1年 金輪雄生



神秘と生命を象徴できる亀をモチーフに描きました。劇的な出発になったと思います。この子亀の未来を思い描いて見てみてください。

美術部門 作者コメント

『再会』 創大4年 秋山英彦



この作品では 中学生の時にアメリカで出会った男の子と8年ぶりにアメリカ創価大学で再会し、その時の喜びを作品にしました。また再会出来るようにと、そして見てくださる方に笑顔になってもらえるようにと気持ちを込めて描きました。

『Silent 叫び』 創大1年 宮井智子



しかくは口です。血が枯れるほどに叫び切って、意味もなく涙が出てくるような。背景の赤は血も枯れる叫びと激情を、青い亀裂は報われたかった思いと今に繋がる希望を表しています。口が鉛筆で書いてあるのは、鉛筆が学校や職場で使うものだからです。これは個人的な自分の自己満足です。学校でひとり、声も出せずに叫ぶしかできなかったあの時の自分を報ってあげただけです。願わくば、同じような人も共に報われますように。

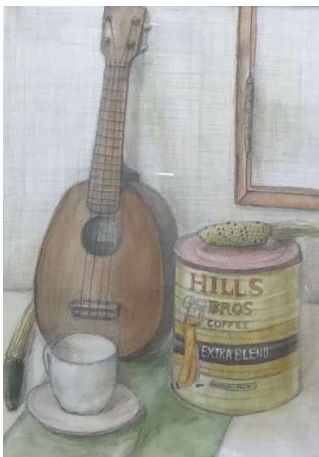
美術部門 作者コメント

『人物群像 #1』 創大3年 斉木亜理沙



この作品は、友人たちを描いていく連作の記念すべき第1作です。大学時代は素晴らしい友人に多く出会いました。幾多の人生を変えるような出会いを刻みました。彼らが今生きているというこの非常に美しい事実、これを絵画という私なりの形で残していければ幸いです。

『水彩画』 創大1年 金子真美



この作品では、空間の温かさを出せればいいと思い、描きました。コーヒー缶のへこみが難しかったです。

美術部門 作者コメント

『成長』 創大4年 川元敦子



以前、岐阜県に旅行した際に見た「恵那峡の大フジ」を描きました。この大フジは樹齢がおよそ 400 年以上といわれ根元の周囲が 2.7 メートルもあり、県下でもまれな大フジみたいです。初めて見た時に受けたインパクトを出せるように描きました。

『静謐』 創大2年 五十嵐涼



線画無しでデジタル画を作成したのは今回が初めてであり、左右のバランスを崩さないように描くのが大変でした。棺の中に横たわる人物は、男か女かというはっきりとした区別をつけていません。性別不詳の人間を棺の中に入れ、顔の半分を映さずにコントラストを強くすることで、見ている方々の想像がしやすいようにしました。

美術部門 作者コメント

『背中』 創大4年 千田俊秀



今年、最後の創芸展は僕の地元である北海道を巡回するということで、感謝の思いを込め、僕の両親の背中を描きました。22年間見てきた二人の背中です。いつかこの背中の向こう側へ、親孝行できるよう自分の夢に向かって進んでいく、人生を勝ち進んでいくという決意で描きました。

『ソコにいるよ』 創大1年 阿乗勇樹



オオサンショウウオが川底に身を潜めている様子を下の方から見上げた構図になっています。下から見た水面とオオサンショウウオの迫力を表現しようと思いこの構図にしました。水面は銀箔を使い表現しました。また、オオサンショウウオは茶色だけでなく様々な色を使い、作品に面白みが出るように工夫しました。

美術部門 作者コメント

『だから今すぐ振り絞る』 創大2年 加藤匠



地平線がどこまでかを知るために、今という時間は用意されている訳じゃない。距離を最初から決めつけることはもったいないし、それを最初から決めるつける資格は一切持っていない。だから、その地平線へ僕ら向かって行く冒険をしている。もし、地平線の果てを目指すことを諦めてしまったのなら、冒険の楽しみや、目的が霞んで見えなくなって、やがて光を失うだろう。

『黄昏時』 創大3年 佐々木慈美



この作品は、最近私が実際に見て感動した風景を写真に撮ってそれをもとに描いたものです。タイトルの「黄昏時」は、一般的に夕方の時間のことをいいます。昼から夜に移り変わる瞬間というのと、私自身が今年は様々なことで変化を感じることがあり、「変化する」という部分で重なりました。「変化」と言っても、悲しい、寂しい、嬉しいと感ずることなど様々な変化がありますが、黄昏時を過ぎて夜になり、前向きな明日を迎えられる気持ちになれるようにと思い、この作品を描きました。

美術部門 作者コメント

『玉葱』 創大1年 山田彩加



玉葱のころころした感じと鮮やかな橙色に惹かれて描きたいと思い、この作品を描きました。玉葱の薄い皮が付いている感じを表現できたのが良かったと思います。こだわりとしては、多くの色を使う事で、深みを出せたところです。暗い部分と明るい部分のコントラストを表現できたのも良かったです。

『透明水彩 2019 春・夏』 創大2年 重森幸恵



今年から書き溜めた写真サイズ、ハガキサイズの絵に加え私の作品としては大きいサイズの中央の絵をひとつの額縁に集めました。作品の中には私の好きなモチーフが沢山詰め込んでありますので、ひとつでも気に入って貰えると嬉しいです。

美術部門 作者コメント

『花』 創大1年 田原美帆



このキャンパスの花は、創価大学のキャンパス内に咲いていたものです。創価大学に入学した頃の頃にふと撮っていた写真をもとにしました。スマホのカメラロールを見た時は、なぜ撮ったのかすら思い出せませんでしたが、シャッターに納めたのだからきっと当時の自分の心に響いたのだらうと思うと、無性にこの花を描きたくなりました。花の美しさ、力強さ、儚さ、柔らかさが少しでも表現できたらと思います。

『飛翔』 短大2年 大澤日花



行く手を阻むような分厚く暗い雲に立ち向かい、晴れやかな空を目指す鳥を描きました。これは人が何かに挑戦する場面で、幸先が悪かったり、途中で躓いたり、し終えた後の結果が悪かったりという様子をこの絵で表現しました。明るい空を信じて諦めない気持ちを込めて、右下の鳥は燃える炎をモチーフにしています。この絵のこだわりは雲の色です。本物に近づけるように、グラデーションを意識して描きました。

美術部門 作者コメント

『秒夏』 短大1年 川西智恵



夏の終わりをテーマとし、背景は朝風寮生である私にとって馴染みのある文学の池にしました。いつも目にする景色に、花を過大にしたり、マンガチックな少女を描くことで、非現実感を生み出すことが出来たと思います。また、真ん中に立つ女の子は女性そのものと、夏そのものの両方の意味を含ませています。この絵を見て、一瞬でも現実を忘れることができた、夢の中にいるような感覚を感じ取って貰えると嬉しいです。

『Flower』 創大3年 小山文花



今まで絵を描いてきて、観念的な、抽象的なものを書くというのが1つの目標でした。創価芸術展ではその目標に少しずつ近づいていこうという気持ちで描いています。今回は花と人物のモチーフを組み合わせるという試みでした。自分の頭の中にあるものを実際に描くのは本当に難しかったと思いますが、イメージに近い色は表現できたと思います。自分の鏡のような作品になりましたが、たくさんの人に見てもらって、何か共感のような感情を抱いてもらえるような作品になっていたらいいなと思います。

美術部門 作者コメント

『Hell And HELL』 創大2年 大山純一郎



天国と地獄と言われるが、実際は地獄しかないのではないか、これを表現した作品になります。

左側の鬼が握っていると刀は鬼丸国綱といって、天下五剣の1つの刀になります。かつて鬼を切ったと言われる刀でもあり、それを握っているということは人間に恨みがあり死後も地獄の番人になって人間を裁いてるようです。

右側は右上の爆発を花火にも捉えられるし、命の爆発を繰り返し輪廻転成を繰り返してるようにも捉えられます。

また骸骨が飲んでいるのが酒で幸せそうにも見えるし、そこにとどまらせるためのドラックにも見えてくる。見た方や考え方によって捉え方が様々な作品です。死後の世界はどんなものなのか考えてみてはいかがでしょうか。

『宝友』 創大4年 本田沙也香



美術部46期の執行期を描きました。あまり時間がない中での制作だったのですが、当時の執行時代を思い出しながら描くことができ、また自分自身最後の創価芸術展で、この絵を描くことができて良かったです。

美術部門 作者コメント

『北海道・十勝』 創大3年 大野優奈



今回描いたのは、実家の畑とその間にある道です。広島出身の母が、十勝の景色が大好きだと言っていたので、今回描きました。十勝は、今の朝ドラの舞台でもあるので、十勝の広さと鮮やかさを知っていただけたら嬉しいです。

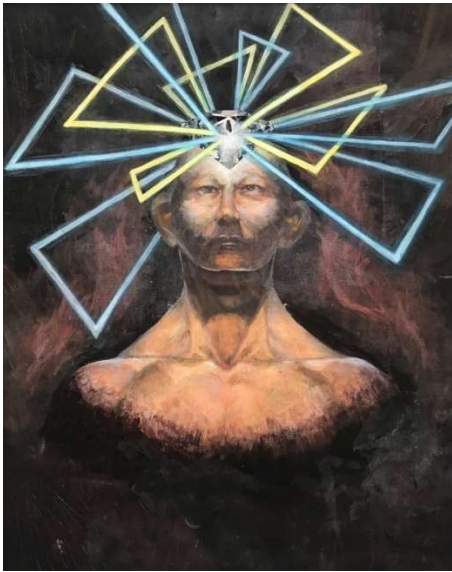
『待ち人』 短大2年 山崎未来



女性の、芯から咲き薫る美しさの表現に努めました。藤は、女性らしさの象徴です。着物にあしらった百合で純粋さと可憐さを、梅は厳しい冬を越え春を告げることから、忍耐と力強さを表現しています。帯の大きな縦の曲線は立涌といい、雲や湯気が湧き上がる様を表したものです。そこに、常に上昇していこうという決意をのせました。題にした《待ち人》という言葉は、人だけでなく、人生の転機・好機のことも指すのだそうです。

美術部門 作者コメント

『夢をみる』 創大2年 菅生梨々子



中3で描いた同じ題の版画をベースに、大事な1人である相棒の「今の自分は大大嫌いでも未来の自分は大好きだ」という言葉からこの絵を描いた。

ポップスの歌詞のような、クサイアイデアだけど奮起させてくれる絵が描きたかった。

苦手な人物で苦しかったが、その分たくさんの学びのある製作だった。

『ユリイカ／日々』 創大2年 竹澤蓮



見たくないものから目を背ける自分の象徴と、それに向き合う勇気を描きました。

美術部門 作者コメント

『WONDER』 創大2年 野見彩珠



この「WONDER」は、私が創価大学に入って感じたことを表現した作品になります。新たに自分の可能性を拓けたこと、まだ見ぬ未知の世界の存在を知ったこと。理解できないような不思議な物事に驚き、戸惑いながらも毎日楽しんでいたこと。キラキラ輝く周りの人たちに憧れたこと、そして、いつか自分もそうなりたいと思ったこと。そんな目まぐるしくて色鮮やかな私の世界を、楽しんでいただけたら幸いです。

立体作品

『受け継ぐ創価芸術』 短大2年 川添あさひ



私は、今回の創価芸術展が第30回という節目の年であるため、自分の思いを込めたケーキを作りました。左右にある白鳥は、創価芸術展の原点の場所が白鳥体育館であったことを知り、原点を忘れてはいけないとの思いを白鳥で形にしました。また、周りのガーベラの花は、挑戦という花言葉を持ちます。自分自身が創価芸術展に挑戦できたことをガーベラの花で表現しました。

美術部門 作者コメント

『過去を偲び、未来へ繋げる』 創大4年 熊谷きとえ



家中に飾られていた刺繍作品に対して緻密で非常に美しいと感銘を受けたのは祖母が亡くなってからだった。この想いを伝えられないことを後悔する中、ビーズ作品を作成する機会が訪れた。私は祖母との繋がりを形あるものとして残すことで償いたいと思った。その結果、巾着に祖母の作品で最も好きな目隠し鬼をモチーフにし、風景画では実家の襖を開いて外に出ていくイメージで制作した。後悔を糧に少しでも私らしく前に進みたい。

『時空を超えて』 創大1年 和田侑佳



まず、平らでガラス製のこのお皿を見たとき、思い浮かんだのが、水面でした。そして、水面から連想されて、金魚をメインにしたデザインにしようと試みました。しかし、それだけでは物足りなさや迫力が欠けると思い、城下町をイメージした背景に至りました。城下町にしたのは、"のぞいてみると、今はなき町の風景が水面を介して映り込んでいる、浮かび上がってくる、今と昔が繋がっている"そんな物語を思い描いたからです。

美術部門 作者コメント

『誓』 大学院2年 大部栄子



ブラジルの土とくすりで作りました。日本の創立者とブラジルにいる自分と地球と宇宙を感じ地球平和の誓いと祈りを込めて、ブラジルの陶芸家本間秀子先生のご指導のもと製作した作品です。

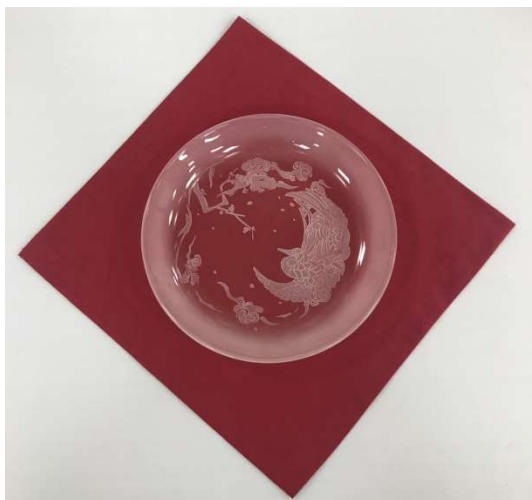
『追想』 創大4年 東郷良咲



創大の中で好きな場所の1つである「周桜」を描きました。私にとって「周桜」はいつも授業やクラブに行くときの通り道でもあり、大好きな友人との帰り道でもあり、日々創大建設に奔走する大尊敬の仲間たちとお花見をした思い出の場所でもあります。私は次の春に卒業し八王子を離れてしまいますが、この景色を忘れたくないと思い描きました。

美術部門 作者コメント

『冬は舞う』 創大1年 六車絵美



この作品はサンドブラストという特殊な砂で硝子を削ったものです。透明感ある白雪のような情景と自然界の力強さを表しています。この作品をきっかけに美しいものに目を止められるようになっていただけたら幸いです。

『芽生える椅子の少女』 創大4年 小林有希



今年の創価芸術展は、30 回展という節目の年であると同時に、私にとって、大学最後の展覧会となります。そのため、作品を出展するにあたり、後悔のないよう、全力で創作に取り掛かろうと決意しました。

そして、以前から構想を練っていた、約 75 センチの、通常より大きめの球体関節人形と、

美術部門 作者コメント

その人形が座る椅子の制作に取り掛かりました。

今回作った球体関節人形は今まで作ってきた人形の中で、一番大きなものということもあり、細部まで仕上げるのにとても苦労しました。

特に頭部については、納得いくまで何度も作り直し出来上がりまで 1 ヶ月以上を費やしました。

そして、人形と同じく制作に苦戦したのは、人形用のアンティークチェアです。

デザインや設計など、一から独学で椅子作りに挑戦するのは想像以上に大変でした。特に、角材から切り出し加工した猫足に、さらに丸みをもたせることに苦労しました。椅子の制作は試行錯誤の繰り返しでしたが、満足いくものが出来て良かったです。

私の好きなもの、そしてやりたいことを全部詰め込んだ作品ですが、球体関節人形の、可愛らしくもどこか不思議な世界観を表現できていれば良いなと思います。

『約束』 創大2年 伊藤響



ある人との鍋でもつつきながら話そうよという約束を思いながら作りました。

『勇往邁進』 創大4年 本田沙也香



龍の中を空洞にする かつ、壺に巻き付いたり浮かせたりと、とても難しかったです。特に龍の鱗に立体感が出るようにと頑張りました。